

# ☆振り返れば、心は自由☆

## ☆〈サロン・あべの〉11月の出会い☆

平成23年11月19日(土) 〈サ

ロン・あべの〉11月の出会いは、

「振り返れば、心は自由」

自身の半世紀をまとめて自費出

版されたお話と「語り」

として、南光仁子さん(スノーマ

ン代表)をお迎えして開催しま

した。

・はじめに

長い間、エッセイを書きたい

と思ってきた。今年4月に『仁

子、あきらめない!』年をとる

ほど、人生は楽しい。』を出版。

自分の詩を書いて、シンガポ

ングライター辻馬氏との、オリ

ジナルCDが付録に付く。

自伝を書いたことにより、

子供の頃から母親から聞いた話

とか、ずっと振り返ってしま

ればならない作業で、忘れてい

たことを思い出したりしながら

書いた。おかげで、重い障害が

生後すぐからあり、日常生活上

淋しい時もあつた。が、気持ち

は常に前を向いていたこと。ち

よっとずつ前に進んできた人生

であつたことに気がついた。

・生い立ち

私は慌てん坊な性格で、8ヶ

月で誕生。当時は終戦子と言わ

れ、若い子の象徴でした。大阪

大空襲に遭って、よる防空壕へ

逃げていった時泣いたらしい。

ものすごく嬉しかったと母が言

っていた。しかし、2歳になっ

ても歩けない。それで検査をし



て小脳出血が判明、脳性小児麻痺であることがわかった。小学生くらいの頃、周りの子どもが学校に行くのに自分は学校へ行けなかった。母に背負われて見ていた。学校へ行きたいなと思っていた。「お母さんと二人の学校やで」と、母が縁側の目のあたる所に机を置いて、簡単な読み書きや計算を教えてくれた。ある時、父が三輪車を用意してくれたので、一所懸命に練習し

て乗れるようになった。それで近所の子どもとも遊びに行くようになった。周りの子どもは学校帰りや胸に名札を付けている。自分はないので、母に頼んで名札を付けてもらった。それをみて「仁ちゃん、学校行ってんの?」「行ってるよ」「うそや」「足の歩けない子がいく学校や、『しいのみ学園』て言うねん」。とつきに、前に姉さんと観た映画に出ていた学校の名を言った。うそをついて怖かった。が、その後、子どもたちは学校の事を言わなくなった。

毎日家での生活。縁側で腰掛けたりして過ごしていた。自宅でNHKの教育ラジオを聴いたりしていた。3人姉妹の末っ子で一番上の姉とは10歳離れていた。真ん中の姉も結婚した。上の姉の夫は、絵を教えてくれた。

18歳になり、結婚も自分の番だと思っていた。車イスがほしい、母は重い腰を上げて車イスを用意してくれた。22歳の時、堺の病院に入院した。いろんな障害を持つ人に出会った。その中に南光龍平氏もいた。しつかりした人だという印象を持ち、自立を考える刺激になった。周りがいろいろと教えてくれたので、家から出る機会を待つ

た。退院して家を出て自立したい気持ちが強くなった。家を見つけて電動車イスで、一人の生活をするようになった。また、編み物も6年程していた。

32歳になっても学校へ行きたい思いがあり、教育相談所に相談した。先生の提案で文部省の義務教育卒業資格検定試験を合格すれば高校に受験できるとアドバイスを受けた。その先生方から5教科を教えていた。そして見事に合格、34歳で藤井寺養護学校高等部(当時)に入学。周りは18歳であったが、修学旅行にも行き、楽しい3年間を過ごした。念願の名札をつけて高校に行った。先生も卒業式に泣いてくれた。一番嬉しかったことは、自分にも母校ができたこと。そして学友、恩師ができたこと。そのことで、すごく幸せになり勇気が出た。

高校卒業後は、職業訓練校へ行くことを決めた。反対されなかった。職業訓練校へも無事入学できた。訓練校の寮生活が始まった。勉強はしんどかったが、がんばった。卒業後は家に戻っておいでと言われたが、別に家を借りて実家の近くに住んだ。その場所に南光龍平さんがよくちよく来てい

た。二人は、結婚を決意するが回りは反対した。何とか周囲の理解と協力を得て、南光龍平さんと結婚した。滋賀県の近江へ新婚旅行に行った。不便なところもあったが周りの人は助けてくれた。結婚に反対していた義父にも葉書を出して、新婚家庭で一緒にすしを食べた。病に倒れた義父から「満足だよ」と言われて嬉しかった。今では、地域全体で守られ、夫も仕事についており、普通の暮らしが送れている。

振り返ると、常に心は自由に動き、行動していたことに気づきました。

お話の後、参加者から感想や意見を聞きました。

「学校に行くことは大切だと感じた。」  
「語りされていてか、泣かすのが上手。」

この日は、あいにくの雨でしたが、笑いあり、涙ありのお腹いっぱい話を聞かせていただきました。人生の中で一所懸命に生きてきた話に感動した(サロン・あべの)11月の出会いでした。

(参加者14名 山村貴司)



## 美智子のこんな話

岸田美智子

### 移動支援の中抜き問題について

最近私は、5・6年前からなっていた白内障が進行し、大好きな読書などができなくなってきました。仕事でも、書類や資料などをチェックしなければならぬことが多いので、困ってしまうことが多くなり、なんとか改善策を考えなければならなくなってきました。なので、病院を受診することになり、たぶん手術を受けることになりました。私が、入院する場合には、ナースコールが押せないと思うし、いろいろな治療や検査を受けるにも、不随意運動で手足が勝手に動いてしまうので、介助者が必要です。私の場合はたまたま重度訪問介護を利用しているの、時間数さえ調整すればへ

ルパーを利用することができると思いますが、その時間数が調整できない場合は以下のような制限があるため、何の制度も使えなくなる可能性があります。このような問題は、地域で生活していく上で、大きな課題だと思えます。

通院時の院内での介助については、重度の知的や精神障害者だけしか認められていませんが、それはおかしいと思います。病気の時は、健常者でも付き添いが必要な時が多いのに、障害者の場合は身体介護が有り型なし型に関わらず、また障害の種類に関わらず、基本的に院内介護は必要だといえます。

例えば私の場合のように、トイレや水分補給以外にも、身体が安定して座ることが出来ず、いつこけるか分からない状態の場合や、コミュニケーションにしても、調子が悪くなったり、初対面の医師との対話には緊張して、声が出なくなるときもありま

す。そして、待ち時間などは予測が付きません。診療中においても、ベットへの移動は2人の介助者が必要ですし、注射や血圧などの測定などにも両手が意志とは関係な

く動いてしまうので、常時見守りが必要で

また、病気にいつなるかは予測できないのに、生活介護型事業所などの日中活動の行き帰りに、通院できないことはとてもおかしいし、安心して医療も使えない現実があります。この様な状況では、地域での自立生活を維持していくことは、難しいし無理だと思えます。

そして、入院時コミュニケーションサポート事業についても、意思疎通ができるならば、利用できないことになっていきますが、本人の希望により利用できるという矛盾した回答になっていると思います。なので私の場合、調子が良い時は介助者と意思疎通が出来るので入院時は、何の制度も使えない状況です。

以上のような中抜きや、制限などを無くして医療が必要となった障害者には、必要な介護制度が利用でき、いつでも安心して入院生活も送れるように、制度改革をぜひ進めてほしいと思っています。

# 「生きる意味を語る資格」

Ｔ先生、先生とお会いしたのは、私が十九のときですから、もう三十四年も前のこと。いろいろお話ししたのは一度だけです。先生は私のことなど覚えていらつしやらないでしょう。

しかし、先生がおつしやった一言が、私の進路を大きく変えました。いつかお礼と、十九歳だった私のその後のことをお話ししたいと思っておりましたが、先生がどこにおられるのかわからず、連絡もできませんでした。

あるとき市民講座のチラシのなかに白髪の先生の顔写真があるのを偶然に見つけました。それで今回、お手紙を書こうと思いついたわけです。

十九の私は哲学者という職業に憧れていました。それで大学の教養課程で哲学を教えられていた先生に、講義が終わって黒板の字を先生が

消しておられたときでしょうか、胸を躍らせながら自分の将来の夢を話しました。先生は、そのあと私を大学の近くの喫茶店に誘ってくださいました。

喫茶店のカウンター席に並んで座ったあと、私は「生きる意味とは何なのか、人生をどう生きていけばいいのか、そういうことを考えて書いていく哲学者になりたい」と、先生に訴えました。先生は講義が終わったあとの疲れのためなのか、やや物憂い横顔のまま、こんなことを言われました。

「君は、いま親に仕送りをもらって生活になんの不自由もなく生きてるんじゃないか。そんな君が生きる意味についてどんなに深く考えたとしても誰の心を動かせると思う？」

そして私が名前をあげた哲学者が、それぞれ戦争が生み出した極限状態のなか生命の安全もないままに恐ろしい暴力と闘っていたことを教えてくれました。

先生が、このことをかなり皮肉な調子でおつしやったのは、それが自分自身への言葉でもあったからでした。先生は大学という守られた場所にあつて哲学を論じている自分に対しても不満をお持ちのようでした。そして「いまもね、

こんなところ、辞めてやろうかと思っているんだよ」とおつしやいました。

先生はそれから数年後、本当に大学を辞めてしまいました。それからどこに行かれたのか、私はその後、三十年以上知ることはありませんでした。そして先生が実際に大学を辞められたことで、先生の言葉は、いつそう私の心の奥に届いたのでした。

先生が大学を去ったその年に、私は地域で暮らす障害者たちに出会います。その一人は自分のために「実験台」になっていたと言っていました。私が衝撃を受けたのは、それが、まだ若い彼にとつては「喜びだった」ということでした。彼はそれによって初めて施設にいても社会に貢献できると思つたのでした。

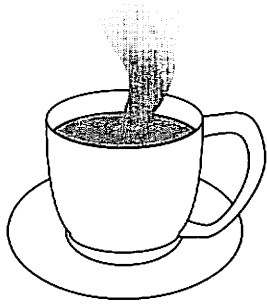
私が出会ったころには、彼はすでにそれを「被害体験」と考えていましたが、私は彼こそは人に生きる意味を問い、考え、その答えを表現できる人だと思いました。私が、その後、社会福祉を学ぶために大学に入りなおし、自助グループについて研究するようになったのは、こうした極限状態を体験した人こそ、生きる意味を問うことができると思ったからだつたと思います。

私は、いまは自死遺族の人たちやアルコール依存症の人たちから学び、その市民運動について研究しています。それ以前は難病の子どもの親の会の研究でした。

丁先生、私は先生の言葉を忘れてはいませんが私が私の人生だけで人間について語ったところで誰の心にも届かないと今でも信じています。

だからこそ福祉と自助グループの研究のなかで出会った人びとに耳を傾け、その言葉をまとめて社会に伝えるのが私の仕事だと思っています。それが哲学者になる代わりに私が選んだ道でした。

三十数年前、喫茶店で話してくださいましたことのお礼と、ご報告のためにこの文を書きました。先生、いつまでもお元気で。(知)



## 晴れのち晴れ

稲垣 恵雄

### ■K先生に思う

昨年12月22日に児童文学作家のK先生がお亡くなりになった。77歳だった。

K先生は、今から40数年前に私が大阪文学学校の児童文学コースに通っていた時の講師だった。K先生は週1度、2時間にわたって児童文学やメルヘンについて詳しく、分かりやすく教えて下さった。その中でメルヘン(童話)の作り方について次のようにおっしゃってくださいました。

- やさしい言葉で書く
- 何度かくり返しをする
- 会話を多くする

今でも上記の3つのことを頭に入れながらメルヘン(童話)を書くことにしている。話は元にもどるが、大阪文学学校を終了し

ても年に数回、K先生と私たち修了生(10名程)が各自の家に集まって作品を書いたり、合評したりしていた。

ところで拙著「かたすみで」を上梓した時K先生に序文をお願いした。その序文中で先生は「緑なす一里塚」ということを書いて下さっていたが、これは1里(4キ

ロ)ごとに緑が増すよう、いわゆる創作を続けてどんどん良い作品を作っていきなさい、とアドバイスして下さっているように受け取っている。

K先生は、また私のような身体の不自由な者にも深く理

解して下さい、何かにつけてよく面倒を見ていただいた。

K先生、長い間お世話になり本当にありがとうございました。ご恩は決して忘れません。



中村かずみ

# 家族でアメリカ!

## ケンタッキー州滞在記

26

クリスマス、お家にツリーは飾られていますか？  
 日本でも、南港の家具屋さんIKEAで生木のツリーを販売していました！小ぶりながら立派なツリーが2千円弱。しかも後で店で引き取ってくれるそうですよ（同額の金券と引き換えとお得です）

アメリカで過ごしたクリスマス、2mはある生モミの木を買ってきて楽しんだことは以前書きましたが、確かにその後の捨て方がずつと心配でした。

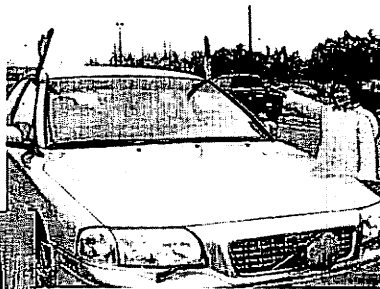
粗大ゴミ？のこぎりで切って捨てなくちゃダメ？

ところが管理人さんに聞けばなんのことはない、そのまんま捨てていいのです。むしろ何の問題なのかわからない様子でした。なるほど普段のゴミも分別なしですし、マンションのゴミ箱はビッグサイズ、4畳ほどの広さに背丈を超える高さがあるプレハブ小屋大で2mのツリーでも余裕で収まるでしょう。

正月は大して祝わないアメリカでは、日本の様に12月25日で即ツリーを撤去するわけではありません。新年も街はクリスマス。我が家も年が明けてから、カラカラに乾いた木をゴミ箱まで担いでいきました。頑丈な鉄の箱の、側面の窓を開けるとそこには、敷地内を1ヶ月きらきらと飾っていた電飾コードが山になって捨てられていました。200本はある木を飾っていたあの量をまさか毎年使い捨ててしょうか？

さておき、枯れたツリーを恐る恐る丸ごと突っ込んでいると変わった形の大型トラックがやってきました。ゴミ箱に寄せて停まると機械の腕が伸び……がっちり和小屋を挟んだと思ったら、丸ごともちあげてに逆さに！

人は最後まで降りて来ず、なんとも豪快かつ手軽に中身のゴミを荷台にぶちまけて回収していきました。逆さにすると屋根もとい蓋が開く



★誰かの車とサキ。前に赤鼻、両窓に角をつけてトナカイなの、分かります？



★我が家のツリースカート。ゴミ箱の写真がなくて残念

★研究室のクリスマスパーティ、プレゼント交換をしました



仕組みです。なるほどあれならゴミのサイズは問題なし！

聞けば一戸建ても同様で、道沿いに各家庭のゴミ箱を並べておけば、専用車が逆さにして回収していくのだから。車が通りやすく道を作っている甲斐があるというものです。

ところで枯れ木と書きましたが、モミの木は1、2ヶ月なら茶色にはなりません。緑のまま……でもやはり葉は落ちます。バラバラと。

本場ではツリースカートといって、ツリーの足元には必ず専用の丸い敷物を置くのが決まりです。様々な柄があんまり可愛いので我が家でも一枚雪だるま柄を、ツリーもない頃から買っていたのでした。家族へのプレゼントをツリーの下に並べるのもこれまた決まりですから、床に直に包みを置きたくなのかな、ぐらいに思っていたのですが、いざ生木ツリーが来た下に敷いて納得。ツリースカートのおかげで落ち葉の掃除が簡単でした。

来年K&Aで生木ツリーを購入される方は、是非ツリースカートもあわせてご購入ください！  
そんなこんなで、アメリカの人でも生ツリーは面倒になるのでしょうか。人工ツリーも沢山売っています。ただ日本では珍しいものが一緒に

並んでいました。

「モミの木の香りスプレー」

やっぱり生の木の代用品なんですな。

また、クリスマス前に目についた面白いものといえばアドベンドカレンダーです。12月のカレンダーにお菓子が仕込んであって、

毎朝その日の窓をあけてお菓子を一つ食べていい、クリスマスまでのお楽しみです。

我が家でも兄妹3人で3枚並べて、毎朝のおやつを楽しんでいました。

〈クリスマスな映画〉

「ホーム・アローン」(1990年103分)

クリスマス、うっかり家族旅行に行かれた子どもが、家で1人で大活躍！知恵と茶目っ気で泥棒を追い払っちゃうマコーレー・カルキんくんが可愛くて楽しい作品です。



## お知らせ

### <サロン・あべの> 1月の出会い

○内容：「新春演奏会」

～ギター、ハーモニカ、三味線の伴奏で  
懐かしい歌を…～

○お客様：「ミュージックサークルキューポラ」

陣内忠之氏(代)、他

○日時：1月21日(土) 午後1時～4時

○場所：育徳コミュニティセンター2階、研修室

[大阪市阿倍野区阪南町5-15-28

TEL06-6621-1901]

○会費：なし

○問合せ先と申込み先：

TEL06-6691-1028 (冨田慶子)



1月はどこのサロンの、  
どのテーマが  
お気に入りですか。  
いい出会いませんか。

[大阪市西区新町4-5-14、  
TEL06-6539-8075]  
問合せ先：宮脇淳TEL090-3949-6973]

■「サロンいたみ」1月の出会い  
日時：1月21日(土)午後2時~4時  
内容：「リース作り」  
場所：伸幸苑[伊丹市寺本6-150]  
問合せ先：安藤れい子TEL072-784-1718

■「サロン淀川」1月の出会い  
日時：1月15日(日)午後1時30分~4時  
内容：「やすらぎ寄席」  
~みんなで、おもしろいことをいっばいしゃべり  
たおす~

ゲスト：「朋友会」の方たち、芸能ボランティアグループ  
場所：「やすらぎ」大阪市淀川区三国本町2-14-3  
会費：なし  
問合せ先：淀川区社協TEL06-6394-2900

■「ウイズ東淀川」1月の出会い  
日時：1月8日(日)午後1時30分~4時30分  
内容：バリアフリーな社会に向けて活動する会の推進。  
発足は平成19年12月1日~  
ゲスト：西村登代子氏(東住吉障害者ふれあいフェスティ  
バル実行委員会事務局長兼会計)  
場所：NPO法人自由空間クラブ(東淀川区淡路2丁目)  
会費：なし  
問合せ先：TEL06-6340-3082(鈴木昭二)

■「サロンにしよど」1月の出会い  
日時：1月24日(土)午後1時30分~3時30分  
内容：未定  
場所：「ふくふく」西淀川在宅センター  
会費：なし  
問合せ先：中本TEL090-9864-9678

■「サロンにし」1月の出会い  
日時：1月14日(土)午後2時~4時  
内容：書初めを楽しもう!!  
用紙、諸道具の準備あり。  
会費：なし  
場所：西区在宅サービスセンター「ながほり」

### サロン・あべの毎月の感謝

○カンパ、切手、宛名シール、お菓子等のご提供、ありがとうございました。

神城昭子、南光仁子、西川和代、平岡太、  
松村美鈴、宮脇信子、米村金治、  
その他の方、(敬称略)

<サロン・あべの>Vol.306 発行：平成23年(2011年)12月17日 定価¥100  
編集人：<サロン・あべの>運営委員会 表題：中西利香・筆  
事務局：〒545-0021大阪市阿倍野区阪南町6-3-26 富田慶子方<サロン・あべの>  
TEL・FAX06-6691-1028 郵便振替口座：サロン・あべの00950-9-26941  
印刷：セルフ社〒546-0044東住吉区北田辺町4-23-2ミスターDビル2F06-6719-8212  
ホームページ：http://pweb.sophis.ac.jp/oka/salon/「サロン・あべの」でも検索できます